

JASO発 暮らしつづける街へ (Part 2) <第 44 回>

東日本大震災第 19 次被害復旧状況調査

(有)共同設計五月社 一級建築士事務所
伊藤昌志

1. 序

令和 6 年 12 月 23・24 日に JASO 東日本大震災第 19 次被害復旧状況調査へ行った。今回の最大の目的は、福島第一原子力発電所の敷地内を視察することにあつた。以下、簡単な経路である。

○ 12/23(月)

浪江駅



浪江道の駅(浪江町)



東日本大震災・原子力災害伝承館(双葉町)



震災遺構・浪江町立請戸小学校(浪江町)

○ 12/24(火)

東京電力福島第一原子力発電所(大熊町)



とみおかアーカイブ・ミュージアム(富岡町)



東京電力廃炉資料館(富岡町)

この視察で、初めて福島の地に降り立った。東日本大震災が起こった時、私は中学生だった。建築を学び始めたのが震災から 3 年後の 2014 年である。学生時代に読み漁った本たちの中には、当然 3.11 のことについて触れていたものも多かったはずだが、私は深く考えることもなく、被災地に向かうこともなかった。

初めての福島。震災から 12 年は経過しているにもかかわらず、それはあまりにも衝撃的な対峙となった。

2. 浪江町

道の駅なみえは、2021 年 3 月に竣工している。震災から 10 年以上経過しての竣工と言うことだ。JR 常磐線浪江駅から北東へ 1 km ほどで国道 459 号沿いに位置している。中にはフードテラスやパン屋、酒蔵見学コーナーなどなどいろいろ入っている。視察当日も多くの人が食事や買い物を楽しんでいる様子だった。道路の向かいには、浪江町役場もあり、浪江駅も近いので駅を中心にコンパクトな町になっている。

写真 1 道の駅なみえ+なみえの技・なりわい館
(※ 特記なき限り、筆者撮影)

写真 2 道の駅なみえ フードコートの様子

浪江町立請戸小学校は、とにかく衝撃的だった。その被災時の状態よりも、ここの土地がまっさらな状態になってしまっていることに。ここに一つの模型が置いてある。一つ一つの家屋には、「〇〇さんの家」のようにキャプションがついていた。浪江町という土地の記憶を消さぬように模型に住人たちの記憶を留めている。今まで見た模型の中で最も美しい模型だった。



写真3 請戸小学校に展示されている浪江町の模型

その土地が、今や津波で流されたあげく、整地されている(写真4)。視察中にもショベルカーやダンプカーが往来していた。模型に宿っていた人々の記憶や生活の痕跡は、きれいさっぱりなくなっていた。



写真4 請戸小学校から見た浪江町 (令和6年12月時点)

3. 双葉町

原子力災害伝承館は、その原子力による災害を伝えてくれるとても良い資料が多いのだが、それよりも浪江町の時と同じく、まっさらな土地に目が行ってしまった。更地と化した土地。これをどのようにみてよいのか私にはわからない。難しい問題だ(写真5)。



写真5 原子力災害伝承館の屋上テラスから見た光景
(令和6年12月時点)

双葉町えきにし住宅は、その名の通り JR 常磐線双葉町駅の駅前に建つ災害公営住宅のプロジェクトとして2020年より設計、2021年から着工し、2024年に竣工した。住戸は全部で86戸あり、「軒下パティオ」と名付けられた共有スペースを多く配置することで、様々な人々の交流を促すことをコンセプトにしている(写真6)。各住戸面積は、43.8㎡～85㎡でタウンハウスと戸建てのタイプがある。印象としてはおおらかなスケールで作られており、窮屈さを感じなかった。「双葉町駅西住宅入居募集のおしらせ」によると、この住宅地には災害公営住宅と再生賃貸住宅があるようだ。ちなみに「災害公営住宅」とは災害により住宅を失った被災者に対して、地方公共団体が国の助成金を受けて整備する公営住宅であり、「再生賃貸住宅」とは、双葉町の人や新たに転入する人が申し込むことができるらしい。この場所で再び、双葉町民として暮らせることは、住人にとって何にもましてうれしいことだろう。さらに新たに転入する人も住むことができるのは、とてもいいことだと思う。元から住んでいる人、新しく住む人が混ざりあい、活気ある町になることを願う。



写真6 双葉町えきにし住宅

4. 富岡町

とみおかアーカイブ・ミュージアムは、2021 年に竣工したアーカイブ施設である(写真7)。館内に展示内容がとても充実しており、富岡町についてかなり詳しく知れる。こういった資料館があることは町にとってはとても大切なことだと思う。町の歴史を辿ることは、町の復興には欠かせない要素だろう。惜しむらくは、時間がなく展示をゆっくり見る時間がなかったことだ。次回行くときにはじっくりと展示を堪能したい。



写真7 とみおかアーカイブ・ミュージアム

とみおかアーカイブ・ミュージアムの隣には、富岡町文化交流センター「学びの森」がある(写真8)。2004年に竣工しており、中には図書館、コンサートホール、大ホールが入っている。視察の日は、平日の昼だった。館内では学生らしき子どもたちが勉強や読書に耽っていた。2004年竣工ということは震災前の竣工である。地震に耐えて、15年経った今も町の建物として使われているのを見ると、とてもうれしい。



写真8 富岡町文化交流センター「学びの森」

その隣には、富岡町役場庁舎が建っている(写真9)。1992年の竣工である。これもまた震災前の建物で今も使われている。このあたりは、富岡駅から離れていることと国道沿いでもないからなのか、とても静かで落ち着いた雰囲気のところだった。



写真9 富岡町役場庁舎

以上に挙げた建物たちは、震災前に建てられたものと震災後に建てられたもので二種類に分けることができる。

震災前に建てられ、現存しており、さらに今も使用されている建物はおそらく震災時に避難所等でも使われたであろう。この建物たちの今の姿は、建物を復旧するために尽力した人々の努力の結晶である。

震災後に建てられたものは、これからのまちづくりの基点となるような人々の意志が込められている。

5. 福島第一原子力発電所

震災から12年経った令和6年。ようやく、福島第一原子力発電所へ一般の人が入れるようになった。放射性物質の減少により安全性が担保されたことが、大きな理由の一つだろう。もちろん内部は撮影不可。なので肌で感じるしかない。身に着けているものをすべて取り、空港のような探知機をくぐり抜け、バスへと乗り込む。バスの運転席の後ろには、放射線量の表示板があり、常時数値を確認できる。少し数値が上がるだけでびくついてしまうのだが、東京電力の職員の方から言わせればMRIより全然低いという。

数値に対してこんなにもビクビクするとは。いやしかし、もっと驚いた数値というか数字があった。東京電力廃炉資料館の福島第一原子力発電所で働いている作業員

の数が表示されている表示板だ(写真 10)。4,560 人！
なんと多いことか！しかも 1 日に！視察中にすれ違う作
業員の方たちは、防護服も着用せずいわゆる普通の作業
着であった。もちろんまだ防護服を着ないといけない部
門というか、作業はあるらしい。しかし、大半は、もう
防護服は不要らしいのだ。



写真 10 東京電力廃炉資料館の原発で働いている
作業員数の表示板

この数字を見て、思うことはたくさんあるのだがそれ
を言葉にする能力は、残念ながら今の私にはない。

この数字は単なる抽象的な数字としてではなく、“震
災復興の現在”、そして“廃炉作業の現実”として、私

の胸に深く突き刺さる。

発災から 12 年、廃炉にかかわる作業員数 4,560 人/日。
この数字を、私たちは強く意識しなくてはならない。

また、令和 6 年 1 月 1 日には、能登半島地震があった。
私は、令和 6 年 4 月、9 月、令和 7 年 5 月に視察に行っ
た。そこでは、避難所暮らしの人々、公費解体等での作
業員の方々、全国各地から集まっているボランティアの
方々が数多くいた。“東北の現在”と“能登の現在”。こ
れらを同時に考えなくてはならないと強く感じている。

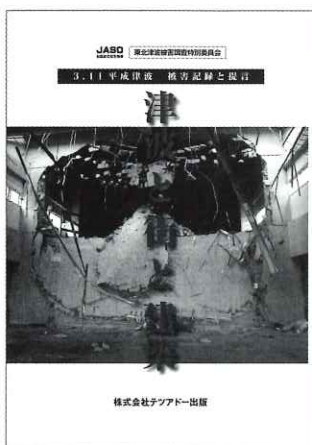


写真 11 福島第一原子力発電所 内部
(撮影：東京電力ホールディングス株式会社)

3.11 平成津波 被害記録と提言

津波と街と建築

NPO 法人耐震総合安全機構 (JASO) 東北津波被害調査特別委員会



- まえがき NPO 法人耐震総合安全機構 (JASO) 安達 和男
東北津波被害調査特別委員会 委員長
- 東日本大震災基礎データ
調査概要
- 事例報告 地区統括/事例

- 考察
津波の種類と特性
津波の強さ 津波強度と調査結果
構造技術者が見た建物の被害 (第一次調査において)
江守 美実
近藤 一郎
増田 信彦

- 提言
耐津波建築設計・診断基準の提案
避難についての提言
津波に強い構造
津波に強い設備
リアス式海岸地域への提言
平野部地域への提言

- 三木 哲
岸崎 孝弘
大岡 彰
柳下 雅孝
河野 進
今井 章晴

- まとめ

- 三木 哲

価格 3,885 円 (税込) 送料別途
(本体価格 3,700 円)

A4 判 オールカラー / 196 頁

お求めは (株)テツアドー出版

〒165-0026 東京都中野区新井 1-34-14 Tel 03-3228-3401